最弱の聖杯の使い手

衛宮　切嗣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
最弱の聖杯の使い手

【Ｎコード】
Ｎ７２６０Ｙ

【作者名】
衛宮　切嗣

【あらすじ】
気が付いたらなんか体が縮んで、どっかの森にいた。
あとなんか魔術師ってのがサポートするとかなんとか。
俺の目的・・・はい？聖杯と過ごせ？なにその最大級の死亡フラグみたいなの？
しかも俺にはまともな戦闘能力がないだと・・・？

召還できるのは英雄？なにそれ怖い・・・。

◇注意◇

これは友人から小説家データを借りて投稿しています。

暇潰しにやってるだけなんで感想は返せませんし、亀更新になります。

もし、かなり人気なら自分のデータを作って投稿します。

ぷろろーぐ。（前書き）

はじめてですがよろしく〜〜。

ぷろろーぐ。

「・・・なんだこれ？僕・・・いやいや、俺はなんでここにいるわけ？」

最後に見たのは大きな杯のイメージとあらゆる武器を持ったヒトだったよな？

それになんか忘れてる気が・・・。

「あー・・・どうすっか・・・ん？ポケットに何か入ってるな」

取り敢えず状況把握に周りを見たり、体をペタペタ触ったりしてみた。

すると右のポケットから小さな手紙のようなものが出てきたので開いてみることにした。

「・・・？」

“ｎｉｃｈｔ”としか書かれていない手紙に戸惑うがそれ以外に荷物はあまりなかった。

調べてみると少し大きめのサバイバルナイフ、何か色々入ってるト

ートバッグ、無駄に高そうなデジタル式の腕時計、裏に“ｉｐａｄ”と書かれた板が近くの木の幹に置いてあった。

恐る恐る、ｉｐａｄなるものに触ると何か文字列が出てきた。

「な、なんだこれ！？なんか絵が中に入ってるぞ！？」

【指紋認証。音声プログラムを解除】

「やーやーこれを聞いてるキミ！おめでとう！キミは選ばれし者だ！」

「・・・あ。これが前に聞いたあいぱっどか。へー、なんか面白いなー」

「まず説明させてもらうと、キミは一回死んでるから」

・・・へ？

「実はそれ、自分の上司が間違えて殺しちゃったんだよね☆」

「な、な、なんですっとォォォォォォォォォォォ！！」

話を纏めたらこんな感じ。

俺、死亡。

←

実は管理ができてなくてミスった。

←

あ、やべ。取り敢えず生き返らせるか☆
ついでに実験もしよう！

←

現在に至る。

「俺はモルモットかァァァァァァァ！！」

「いわゆる、能力（チカラ）はキーを唱えればできるから。頑張ってね！あでゅー」

それっきり、あいぽっどから音声は流れなくなった・・・。

なんて投げやりな奴だ。俺に何をせーゆーねん。

「・・・名前、なんだったかな・・・」

名前は生き返る際に失ったようで、自分の名前を言おうとすると砂嵐がかかるようにボヤける。

前世の記憶は穴だらけで自分が何者で、何をしていたかがかなり曖昧な感じである。

あの音声から新しい名前はもらったが俺に何をさせたいのかはまったくわからない。

「・・・能力（チカラ）ってなんだ？あいぽっどになんかあるのか？」

他にもなんかサポートする魔術師を送るから。みたいにも言われたし、なんかあいぽっどに情報はないのかな？

使い方はよくわからないが四苦八苦しながら操作してみると変なもんが出てきた。

「“ｎｉｃｈｔ”？またこれか・・・」

《ｎｉｃｈｔ　ｓｅｒｖａｎｔ》

「ｓｅｒｖａｎｔ（従者）？なんなんだこれ？」

操作してさらに調べると“ｎｉｃｈｔ　ｓｅｒｖａｎｔ”以外になんかステータスみたいなんが出てきた。
別に気になるものではないので後回しにして現状を知れるような情報を探す。

「み、見事にない・・・」

小さな体の足を足をプラプラさせながらあいぽっどを操作してみても全部が“ｎｉｃｈｔ”とか“ｓｅｒｖａｎｔ”しか無かった。
体もなんか縮んでるし。どこのバーロー探偵だバカヤロー。
死ぬ直前に着ていた服なのか、全身が黒というなんか浮いた感じのちょっと洒落たダボダボの服を着ていた。
死ぬ前はかなり体が大きかったのか、それとも小さくなりすぎたのか、腕は完全に隠れて余った部分が腕の二倍、足も似たような感じだった。
これは歩きづらい。一歩踏み出せばこけるから不便この上ない。

「くそぅ・・・」

結果、そこから一歩も動けない。色々入ってるトートバッグを見ても服はなかったから脱ぐわけにもいかない。

というか脱いだら完全なる露出魔か露出狂。ブタ箱にぶちこまれるか、黄色い救急車に運ばれるかなんかされるだろう。

子供体型だから保護されて孤児院逝きもあり得る。

「このあいぱっど、役に立たん。知りたい情報はないし、なんか無駄知識しかないもん」

このあいぱっどには肉の捌き方、サバイバル術初級、中級、上級、サバイバル名人とかそんなんしかない。

俺にサバイバルをさせるつもりか。二日で猛獣の餌になる自信はあるぞ？（キリッ

「あーいたいた！いたよお母様！」

「ぬお？」

「ああ、やっと見つけました・・・探しましたよ」

声がする方を見る。

そこには二人の女性と少女がおり、こちらに走ってくるのが見えた。

二人は親子なのか、かなり似たような容姿をしている。

雪のようにどこまでも白い、美しい長髪、宝石のような綺麗な赤い瞳、そして整った顔立ち・・・まさに美人と美少女と言えるだろう容姿であった。

さらに、服装も似ており、二人は白い冬に着るようなセーターのようなものを着込み、色違いの毛糸の帽子も被っていた。

美人は白、美少女は黒のイメージが強い。

そんな二人は木の根に座る俺に近付くと嬉しそうに笑う。

その顔は美しいため、目を奪われるだろうが、俺はおかしいのか、なんで笑う？という疑問となぜ俺を？という疑問が強かった。

「やっと見つけたよー！今まで探してたのにー！」

「・・・あんたら、誰だ？」

「あー！ひどーい！なんにも聞いてないのー！？」

「こらこらイリヤ。困ってるからやめなさい」

どうやら美少女はイリヤ、というらしい。

母親らしき美人にぷんすかが似合う様子の美少女をなだめながら俺と目線を合わせるようにしゃがみ、子供と話すように語りかけてきた。

「まずははじめまして。私は“アイリスフィール・フォン・アインツベルン”、この子は娘の“イリヤスフィール・フォン・アインツベルン”、よろしくね？」

「ああ。俺にはまだ名はないがよろしく頼む」

「ええ。さっそくですが本題に入らせていただきます」

「うん？」

「私とイリヤは貴方のサポートをするために呼ばれ、貴方と会いました。ここまではいいですか？」

「理解した」

アイリスフィール・フォン・アインツベルンと名乗る美人はさくさくと説明をする。

どうやら二人は前世？はアインツベルンの魔術師、ホムンクルスと呼ばれていたらしく、とある戦争の末に命を落としたとも聞いた。

そこで神と名乗る変な奴と出会って親子共々、俺のサポートをするために送られたらしい。

・・・なんか途方もない話だな。幻想と呼ばれる魔法を使うとか言われてもなぁ・・・。

「正確には魔術ですよ。魔法はまさに私達、魔術師からすれば目指すべき場所ですから」

「違いがわからん」

「あはははは・・・とにかく、大体はわかりましたか？」

「七割はな。全部が全部、信じるわけにはいかないんでな。あんたらが俺の味方とは限らないしな」

「・・・よっぽど前世は苦労したのかしら？（ボソッ」

「それで？俺は何をすればいいんだ？まさか世界を破壊しろとかじゃないよな？」

「あ、それはですね・・・イリヤ、起きなさいイリヤ」

俺とアイリスフィール・フォン・アインツベルンが会話をしているとイリヤスフィール・フォン・アインツベルンはいつの間にか、俺の膝で寝ていた。

それをアイリスフィール・フォン・アインツベルンが叩き起こして二人で並ぶと頭を下げるようにしゃがんだ。

「なにしてんだ」

「貴方の目的。それは・・・」

この時から、俺は新たな使命と共に新しい人生を歩むことになった。

「貴方の右目に宿るあらゆる平行世界に存在する“ｎｉｃｈｔ（聖杯）”と共に過ごすことです」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんで？」

カチリ・・・。

【サーヴァント召還制限解除】

【セイバー】

【ランサー】

【アーチャー】

【キャスター】

【アサシン】

【バーサーカー】

【ライダー】

【召還リストを解放】

【並びに魔眼“聖令呪”の一部も解放】

【“聖杯”プログラム・・・始動・・・】

ガチンッ！

歯車が噛み合う音が静かに俺から響いた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7260y/

最弱の聖杯の使い手

2011年11月22日05時18分発行